

# ビール好きが高じてホップ栽培をするため横手市へ

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



**Pegasus Hop Farm**  
(横手市)

代表 みとう ひろゆき 美頭 皓之

**経営概況**

経営面積 | 畑: 1.2ha

作物 | ホップ

労働力 | 本人1名

販売先 | 大雄ホップ農協、クラフトビール醸造所(羽後町、秋田市、横手市)



Pegasus Hop Farm

大好きなビールに関わる仕事をしたいと、都内の税理士事務所を退職して横手市に移住し、ホップ栽培に取り組んでいる男性がいます。栽培したホップは、ホップ農協だけでなく県内複数のクラフトビール醸造所にも出荷し、横手市のクラフトビール醸造所と連携して、横手市産ホップを使ったビールでホップの地産地消の拡大を目指しています。

## ▶ きっかけ

東京都出身の美頭さんは、都内の税理士事務所に勤めていましたが、大好きなビールに関係する仕事をしたいと考え、ビール原料であるホップの栽培に取り組みたいと思っていました。

税理士事務所を退職後、ホップ産地である岩手県や秋田県に問い合わせたところ、秋田県農業公社から横手市の紹介がありました。横手市はホップ農協や大手ビール会社等と連携協定を結びホップ栽培を振興しているものの、担い手不足が進む産地であったため、新規就農には良いと思いました。

そこで、平成31年に横手市に移住し、同市の園芸振興拠点センター新規就農者向け農業研修に新設された「ホップコース」で2年間の研修を受け、令和3年には同市大雄地区で後継者のいない生産者からホップ畑59aを引き継ぎ、新規就農しました。



●引き継いだホップ畑

## ▶ 取組

ホップはつる性の多年草で、花付きを良くするためつるを1株に4～5本残し、それ以外の芽はすべて除去します。引継いだホップ畑には、ホップの株が1,000株以上あり、植えてから40年も経過した株からは200～300本も芽が出ることから、芽かき作業が大変だそうです。管理作業は、つるの誘引や後から出てくる余分なつる芽の成長抑制などやるのがたくさんありますが、手入れをすればそれだけ収量が上がることを経験しました。



●ホップ畑と美頭さん

横手市大雄地区では、高齢化等でホップ栽培をやめる農家が多く、その農地を引き継いで毎年面積を拡大し、令和6年は1.2haで栽培する予定です。また、就農2年目からは、欧米種のホップ苗十数品種を栽培し、秋田の気候や土壌に合う品種の研究をしています。

## ▶ これから

ホップの主な出荷先はホップ農協ですが、羽後町や秋田市のビール醸造所のほか、令和6年2月に横手市内にオープンした知り合いのクラフトビール醸造所「sunao brewery(すなおブルワリー)」にも出荷を開始しました。



●sunao brewery 代表の津川さん(左)と美頭さん(「sunao brewery」前で)

美頭さんは、地元のビール醸造所と連携し、横手市産のホップで作ったビールを製造・販売することで、ホップの更なる地産地消の拡大を目標としています。

また、ビールを自分の出身地である東京へ出荷することにより、仕事の繋がりを作り、秋田のホップを紹介していきたいと話していました。

(●印写真:美頭さん提供)

